

海外食料需給レポート

(平成 30 年 10 月)

平成 30 年 11 月 5 日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、そのうち、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、安定供給に向けて世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートの対象は国民の方々の中でも、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点としている事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に作成、公表します

5 ここに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html

(3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2018 年 10 月の主な動き	1
II	2018 年 10 月の穀物等の国際価格の動向	2
II	2018/19 年度の穀物需給（予測）のポイント	2
III	2018/19 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	南米の大豆・とうもろこし作付け、貿易動向	3

(資料)

1	穀物等の国際価格の動向	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	7
3	原油価格、為替、海上運賃の動向	8
4	平成 30 年 4 月以降の食品小売価格の動向	9

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	6
3	米	10
II	油糧種子	
	大豆	17

【利用上の注意】

(概要編)

I 2018 年 10 月の主な動き

1 米国のとうもろこし、大豆の良好な作柄と輸出拡大

10 月 28 日現在、米国のとうもろこしの収穫率は 63%、大豆は 72%と、降雨のため前年度より遅れている。米国農務省の 10 月の需給報告によれば、とうもろこし、大豆の生産量はそれぞれ下方修正されたものの、とうもろこしは史上最高の単収で生産量は 2016/17 年度に次ぎ史上 2 位、大豆の生産量は史上最高となる見込みは変わらず。

なお、世界的な小麦の減産により、飼料需要の代替性のあるとうもろこしについて世界の輸入が史上最高となる中、他の輸出国と比べて価格競争力があることから 2018 年の米国産とうもろこしの輸出量は史上最高に並ぶと見込まれている。

2 南米の作付け動向

ブラジルでは、9 月中旬以降、大豆、夏とうもろこしが作付期を迎えた。降雨に恵まれ、作付けは順調である。ブラジル産大豆の中国向け輸出が大幅に増加していること等から、2018/19 年度において、大豆、とうもろこしとも作付面積が増加する見通しである。

一方、アルゼンチンは、財政再建の目的で、9 月上旬に、一時廃止していた小麦・とうもろこしの輸出税の賦課を再開し、大豆の輸出税についても引き上げた。作付けについては、とうもろこしは現在進行中、大豆はおおよそ 10 月末から開始されるが、輸出税が作付け意欲にも影響するとみられる。

3 フィリピン・エジプトの米輸入増と、世界の米貿易への影響

ジェトロによれば、8 月の消費者物価の上昇や 9 月中旬の台風 22 号による供給減での農産品価格の高騰の懸念から、フィリピン・ドゥテルテ大統領は、9 月 21 日、国内の農産品価格の抑制と、農産品の輸入拡大のための行政命令を発令し、米については、輸入業者の許可及び認可の緩和や、国家食糧庁（NFA）にミニマム・アクセス枠を超える米の追加輸入を行う権限が付与された。この結果、輸入量は大きく増加することが予想されている。

一方、中・短粒種の輸出国であったエジプトは、ナイル川の水不足による米の作付け制限から 20 年ぶりの減産が見込まれ、今後、輸入国となる見通しである。

これらの結果、世界の米の貿易量は史上最高となり、ベトナムやタイの新規輸出需要を刺激すると見込まれている。

Ⅱ 2018 年 10 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、9 月下旬は、190 ドル/トン前半で推移。その後、豪州の干ばつや、大豆、とうもろこしの価格上昇が支援材料となり、10 月半ばに 190 ドル/トン前半に値を上げたものの、米国産小麦の輸出需要が低調であったこと等から値を下げ、10 月下旬現在、180 ドル/トン前半で推移。

とうもろこしは、9 月下旬は、140 ドル/トン前半で推移。その後、米国中西部の降雨による収穫遅延の懸念や、米国農務省需給報告で米国産の単収が下方修正されたことから、10 月中旬に 140 ドル/トン後半に値を上げたものの、天候回復による米国産の順調な収穫から値を下げ、10 月下旬現在、140 ドル/トン前半で推移。

米は、9 月下旬は、430 ドル/トン台で推移。その後、フィリピンの 25 万トンの入札や、タイバーツの為替変動で値が上下したものの、10 月下旬現在も 430 ドル/トン台で推移。

大豆は、9 月下旬は、310 ドル/トン台前後で推移。その後、米国中西部の降雨による収穫遅延の懸念や、米国農務省需給報告で米国産大豆の生産量が市場予測を下回ったことから 10 月中旬に 320 ドル/トン後半に値を上げたものの、天候回復による順調な収穫の進展から値を下げ、10 月下旬現在、300 ドル/トン後半で推移。

(注)小麦(12月限)、とうもろこし(12月限)、大豆(11月限)はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2018/19 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量 は、前月から下方修正され 25.6 億トン となり、消費量 の 26.2 億トン を下回る見込み。

また、前年度に比べ期末在庫量、期末在庫率 は減少し 22.6% に低下するも、近年、期末在庫率が最も低下した価格高騰年の 2012/13 年度を上回る見込み。（資料 2 参照）

(注：数値は米国農務省需給報告による)

生産量は、前年度と比較して、とうもろこしが増加するものの、小麦、米が減少するため、前年度をわずかに下回り 25.6 億トンの見込み。

消費量は、小麦、とうもろこし、米とも前年度を上回り、世界全体では前年度を上回る 26.2 億トンの見込み。

貿易量は、小麦は減少も、とうもろこし、米が増加し、4.3 億トンと前年度を上回る見込み。

期末在庫量は、5.9 億トンと前年度に比べ減少し、期末在庫率も 22.6%と前年度(25.2%)に比べ低下する見込み。

Ⅳ 2018/19 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の 生産量 は、前月より下方修正され 6.04 億トン となり、消費量 も下方修正され 5.88 億トン となったため、生産量が消費量を上回る 見込みは変わらず。

一方、期末在庫の積増しにより、期末在庫率 は前年度より上昇し 21.0% となる見込み。

(注：数値は米国農務省需給報告による)

V 今月の注目情報：南米の大豆・とうもろこし作付けと貿易動向

ブラジルでは、9月から2018/19年度とうもろこし、大豆の作付けが開始され、アルゼンチンでも10月以降同様に作付けが開始された。中国が米国産大豆の輸入に関し追加の課税を行ってから、中国におけるブラジル産大豆の輸入が大幅に増加している。最近の南米の作付けと貿易動向についてまとめた。

1 ブラジル・アルゼンチンのとうもろこし・大豆の生産状況

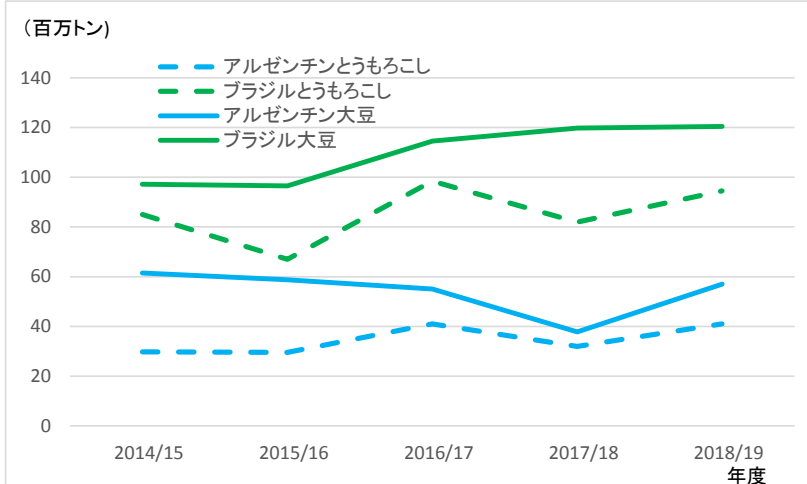
ブラジル・アルゼンチンのとうもろこし・大豆の生産状況については、エルニーニョによるとみられる天候の影響等もあり、年ごとの生産量の変動が激しい。ブラジルについては、大豆の作付面積は中国向け需要増から増加傾向にあるが、とうもろこしは、大豆の作付け指向が強いため、大豆と同時期に作付けする夏とうもろこしが減少するかわり、大豆の収穫後に作付けする冬とうもろこしが増加している。アルゼンチンについては、大豆、とうもろこしとも概ね横ばいである。

2017/18年度は、アルゼンチンでは、干ばつの影響から大豆、とうもろこしとも大きく減産、一方、ブラジルでは、作付面積が減少したとうもろこしは減産となったものの、大豆は史上最高の豊作となった。(図1参照)

図1 ブラジル・アルゼンチンの大豆、とうもろこしの生産量の推移

2 2018/19年度の作付け動向

ブラジルでは、9月中旬から大豆や夏とうもろこしの作付けが開始された。ブラジルの産地では降雨に恵まれ、土壌水分が潤沢にあるため作付けは順調に推移しており、米国農務省(USDA)によれば、主産地の南部のパラナ州では10月15日時点で、大豆の作付け進捗率は47%、とうもろこしは



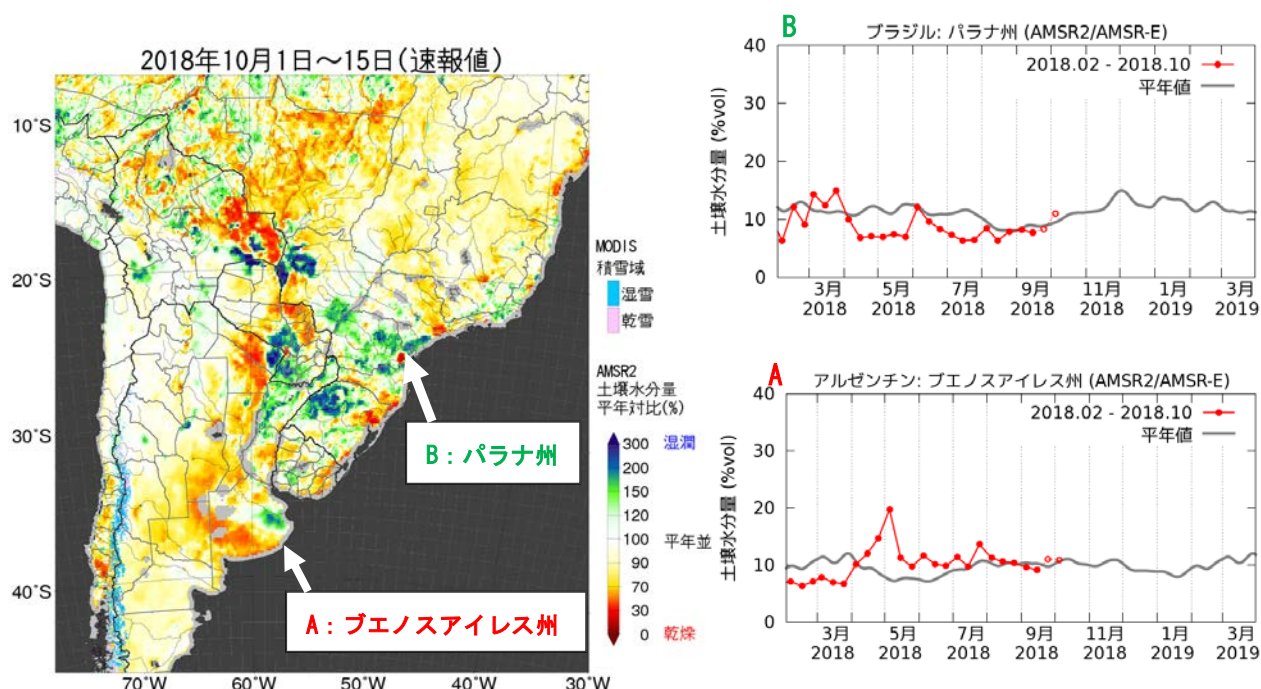
資料：USDA「PS&D」(2018.10)をもとに農林水産省にて作成

85%である。中西部のマト Grosso 州では10月19日時点で大豆の作付けの進捗率は50%である。作付面積については、ブラジル食料供給公社(CONAB)の10月レポートによれば、天候に恵まれ、大豆は、35.4~36.2百万ヘクタールの範囲で前年度(35.1百万ヘクタール)と比べて0.8~3%増、とうもろこし(夏とうもろこしと冬とうもろこしの計)は16.6~16.8百万ヘクタールの範囲で、前年度(16.6百万ヘクタール)と比べて0~1.1%増の見込みとなっている(図2参照)。大豆の作付面積増の背景には中国向け大豆の輸出増があるとみられる。

一方、アルゼンチンでは、とうもろこしについては、ブエノスアイレス穀物取引所の週報(10月25日)によれば、作付けが開始され、天候に恵まれ、進捗率は34.4%である(図2参照)。作付面積は5.8百万ヘクタールと前年度(5.5百万ヘクタール)より増加の見込みであるが、9月に導入された輸出税の影響が不透明のため変動しうるとしている。大豆については10月末に入り作付けが開始された。ブエノスアイレス穀物取引所の10月25日時点の予測では、作付進捗率は2%となっており、作付面積は17.9百万ヘクタールで前年度(17.7百万ヘクタール)より増加する見込み。

図2 南米の土壤水分量

10 月前半のブラジルのパラナ州、アルゼンチンのブエノスアイレス州の土壤水分は概ね平年並みあるいはそれ以上



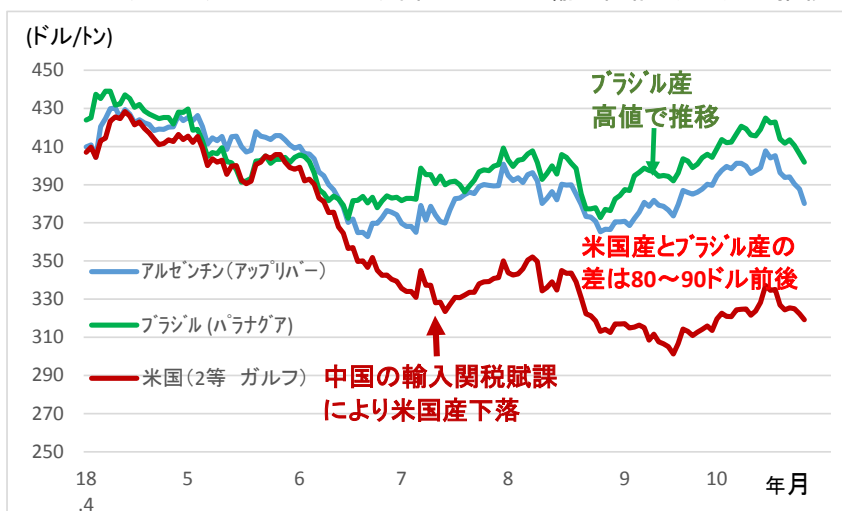
出典: JAXA JASMAI データ (2018 年 10 月 1 日から 15 日)

3 今後の輸出動向と世界貿易への影響

7 月に中国が米国産大豆について 25%の関税を賦課したこと、から、ブラジル産大豆の中国向け輸出が大幅に増加したため、ブラジル産大豆の期末在庫が大きく減少し、10 月時点でブラジル産大豆の輸出価格 (FOB) は米国産と比べて 80~90 ドル/トン程度高い(図3 参照)。一方、米国産大豆については中国向けの輸出が少ないため在庫が積み上がっている。アルゼンチンは、干ばつによる減産により、輸入量が輸出量を上回っている。

今後の 2018/19 年度の輸出に関しては、ブラジルについては、とうもろこしは、干ばつの影響を受けた前年度より増産が見込まれていることから、輸出の増加が見込まれている。また、大豆は、中国向けの輸出増で 2017/18 年度の期末在庫が大幅に減少することから、前年度よりわずかに減少の見通しである。

図3 ブラジル、アルゼンチン、米国大豆の輸出価格 (FOB) の推移



資料: IGC(国際穀物理事会)のデータをもとに農林水産省にて作成

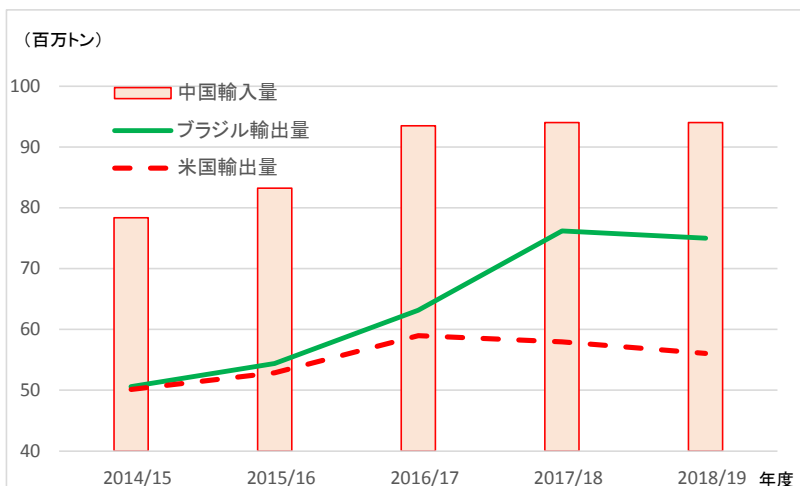
アルゼンチンについて、とうもろこし、大豆とも干ばつの影響を受けた前年度と比べ増産となることから輸出量も増加するとみられているが、輸出税が賦課されることから、ブラジルや米国と比較して価格競争力は劣るとみられる。

中国農業農村部の10月19日の農産物市場動向に関する記者会見によれば、中国の1-8月の大豆輸入量は6,203万トンで去年同期より2%減少しているが、輸入先の7割近くがブラジル産に集中している。また、報道によれば、COFCO(中国糧油グループ)がブラジル国内に中国向けの穀物や油糧種子を保管するための6万トン級のサイロを建設中とのことである。

一方、中国農業農村部の10月26日プレスによれば、大豆を始めとする輸入タンパク原料への依存度を削減するため、豚・鶏用飼料の配合設計の見直しを行っている。

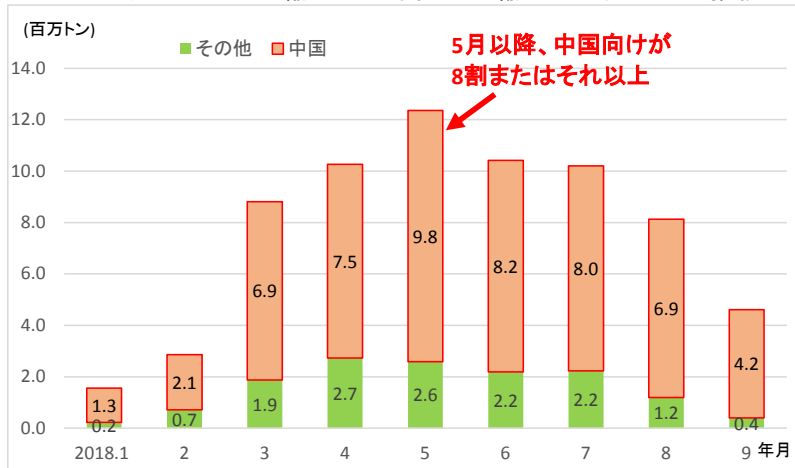
このような中国の貿易・投資動向に加え、今後、生育期を迎える南米産地の降雨量が少なくと作柄や我が国への輸出に向けられる冬とうもろこしの作付けにも影響を与えるため、引き続き、南米の大豆やとうもろこしの生産・輸出動向には注視が必要である。

図4 ブラジル、米国の大豆輸出量と中国の大豆輸入量の推移



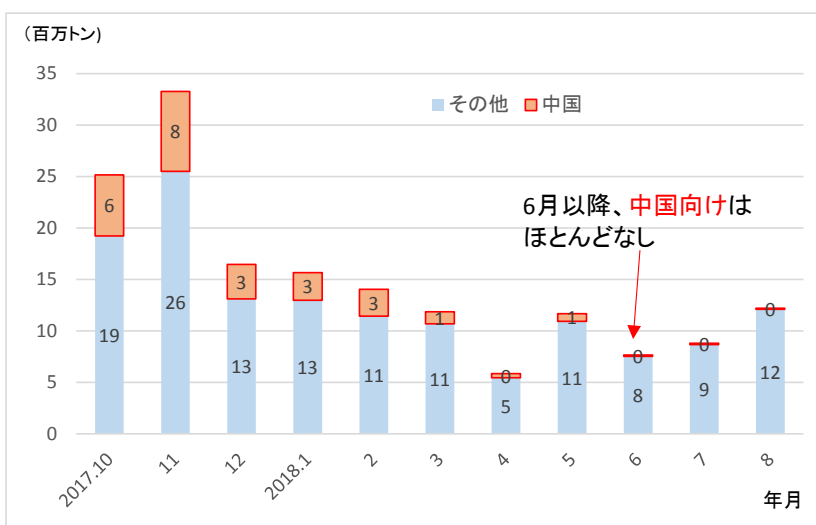
資料：USDA「PS&D」(2018.10)をもとに農林水産省にて作成

図5 ブラジルの大豆輸出量と中国向け輸出量の月ごとの推移



資料：ブラジル商工サービス省資料をもとに農林水産省にて作成

図6 米国の大豆輸出量と中国向け輸出量の月ごとの推移



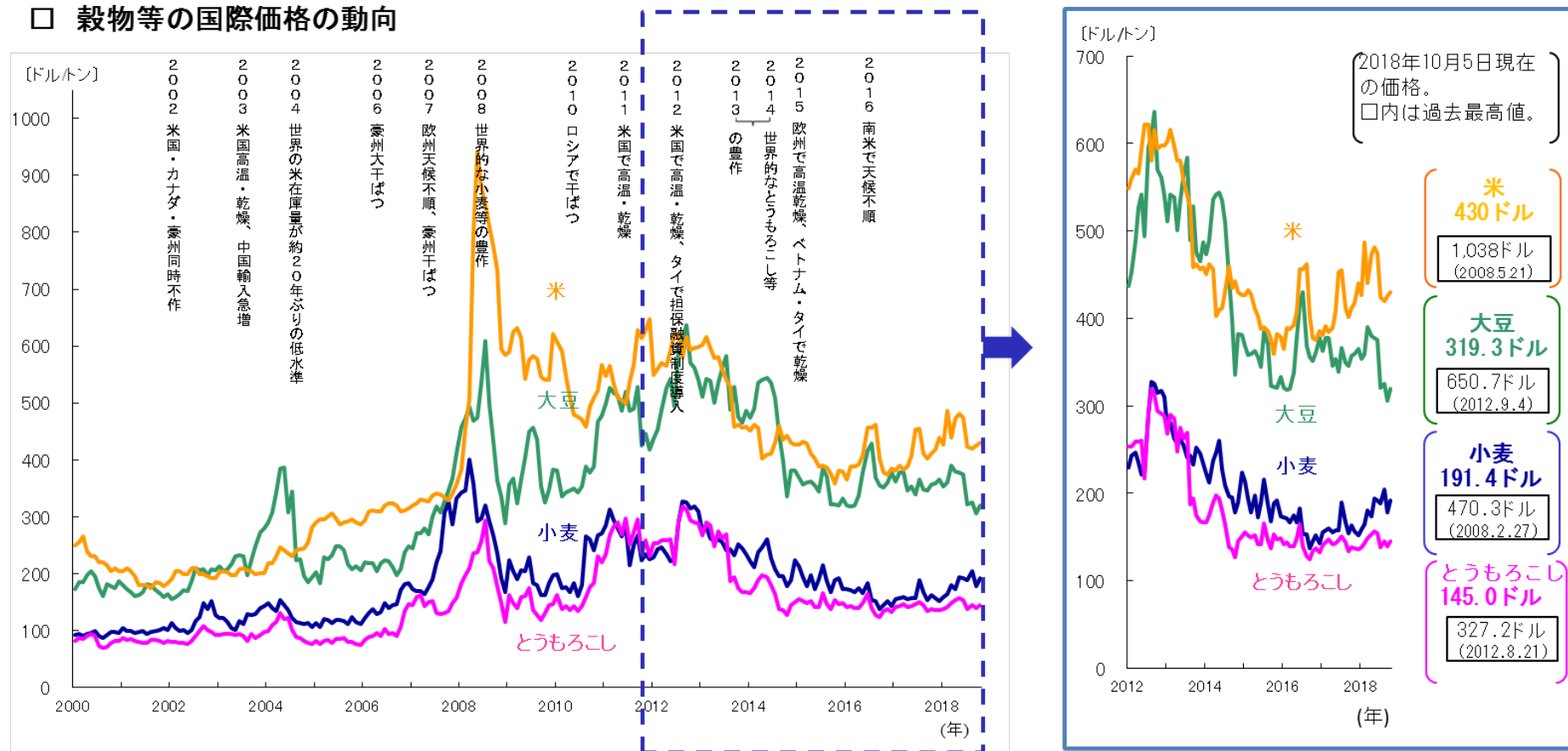
資料：USDA Export Sales をもとに農林水産省にて作成

資料1 穀物等の国際価格の動向(ドル/トン)

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこしの豊作、大豆の南米での増産や米国での豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米はタイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



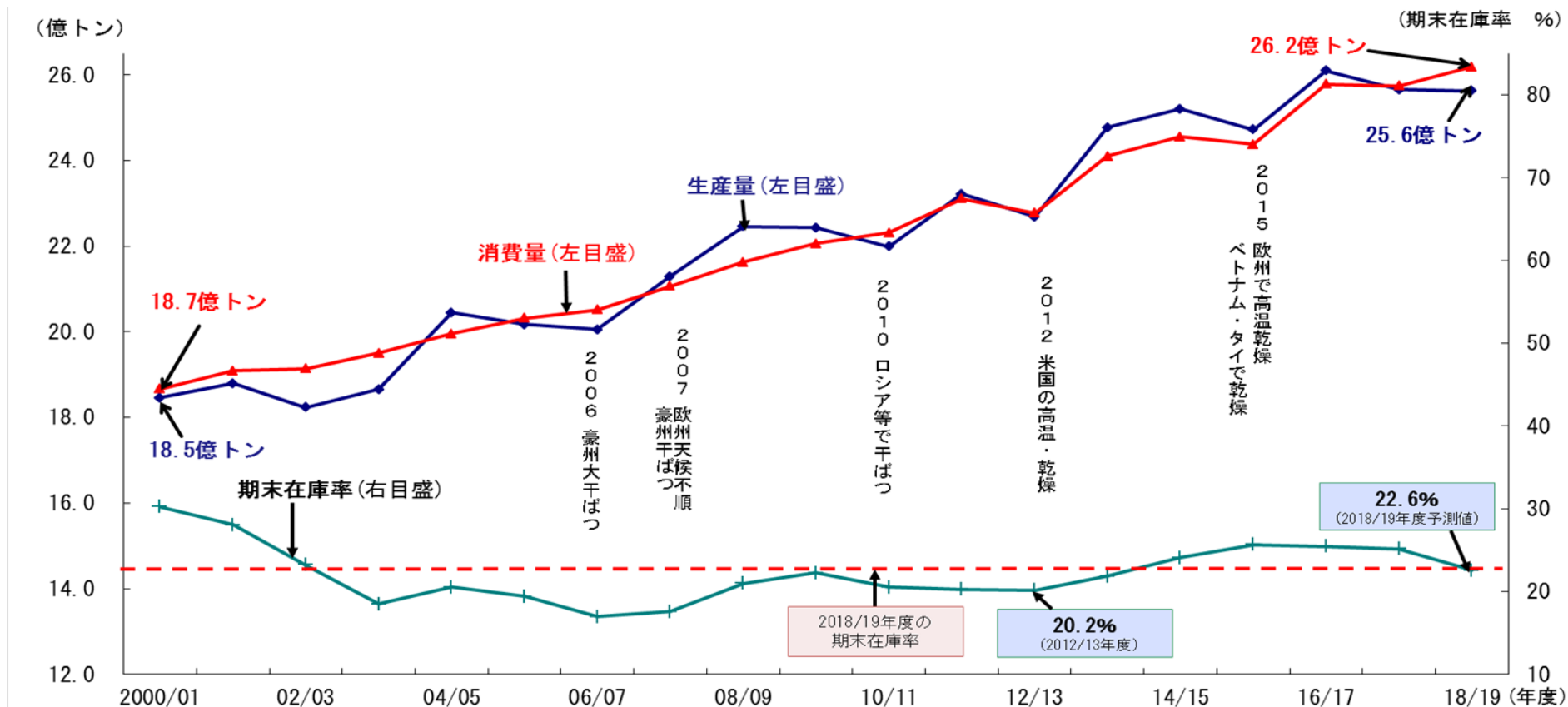
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2018/19年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2018/19年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り22.6%となるものの、直近の価格高騰年であった2012/13年度(20.2%)を上回る見込み。

□ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



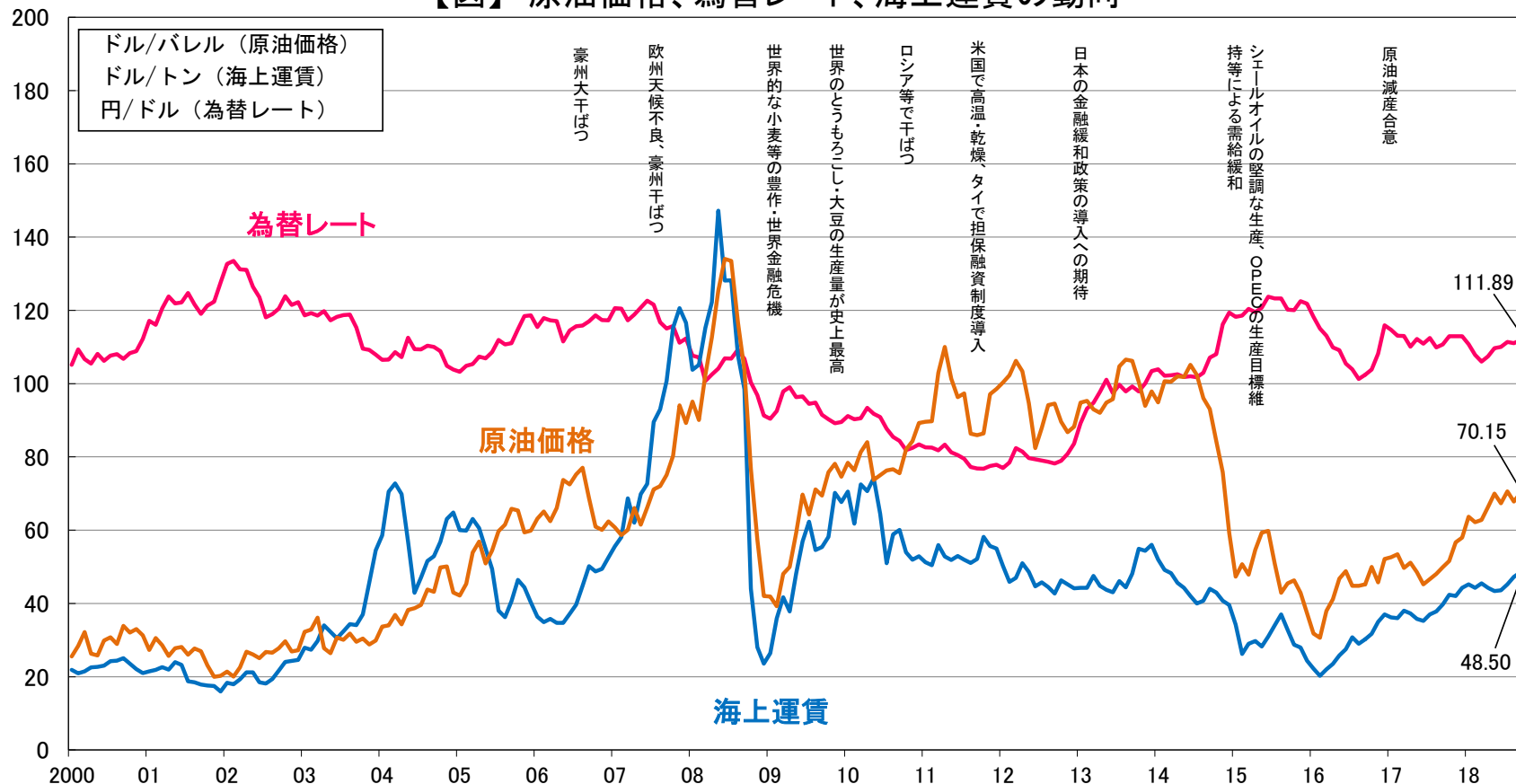
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (October 2018)、「FPS&D」

(注) なお、「FPS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 原油価格・為替・海上運賃の動向

- 近年、為替レート、原油価格及び海上運賃の大幅な変動が、我が国の食品における原材料コスト・価格に影響。
- 円/ドル為替レートは、2012年の金融緩和等により円安となった後、2017年以降は110円/ドル程度で推移。原油価格は、2008年から2009年初めにかけて大幅に下落した後、上昇傾向であったが、2014年6月以降にシェールオイルの堅調な生産、OPECの生産目標維持等による需給緩和で下落、2016年以降、減産合意等から上昇。海上運賃は、2014年に新造船の供給増や原油価格の影響等により下落、2016年2月以降、原油価格の上昇や船腹需要の増加等により上昇。

【図】 原油価格、為替レート、海上運賃の動向



資料：(原油価格)内閣府「海外経済データ 月次アップデータ」、米国エネルギー情報局(U.S. Energy Information Administration)「Weekly Petroleum Status Report」週別価格の平均値、(海上運賃)国際穀物理事会(International Grains Council) Ocean Freight Rates, 「World Grain Statistics」, 「IGC Grain Market Indicators」, 「World Maritime Analysis Weekly Report」(米国ガルフー日本間パナマックス級の海上運賃)週別価格の平均値、(為替レート)日本銀行主要時系列統計データ表月次データの月中平均を基に農林水産省で作成。なお、掲載されている数値は2018年9月の平均値である。

資料 4 平成30年4月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

平成30年4月～平成30年9月の 食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)												
	H25	H26	H27	H28	H29	H30						上昇率 (前年 同月比)
品目	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
生鮮食品を 除く総合	94.5	97.7	100.0	99.7	100.2	100.9	101.0	101.0	100.9	101.2	101.3	1.0%
食パン	96.3	98.5	100.0	101.1	100.9	100.9	100.7	100.8	101.0	101.5	102.4	1.4%
即席めん	92.0	94.2	100.0	100.0	99.5	100.1	99.4	97.6	99.1	98.7	98.6	-0.9%
豆腐	94.5	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	100.8	100.7	100.8	100.7	100.7	0.1%
食用油 (キャノーラ油)	102.6	102.8	100.0	97.8	94.5	93.4	93.4	93.4	93.4	92.4	92.9	-0.1%
みそ	99.7	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	99.7	100.2	100.5	99.6	100.0	1.2%
チーズ	87.4	97.9	100.0	99.3	98.8	100.4	103.4	103.5	104.6	105.5	104.4	4.2%
バター	90.9	95.0	100.0	101.5	101.7	101.9	101.5	101.9	102.2	102.1	102.0	-0.1%
マヨネーズ	95.0	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.4	94.6	95.3	94.7	94.8	-1.8%

資料: 総務省消費者物価指数

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】平成30年4月～平成30年9月の 食品小売価格の動向(速報値)

食品価格動向調査(農林水産省)													
	H25	H26	H27	H28	H29	H30						上昇率 (前年 同月比)	上昇率 (前年 同月比)
品目	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月		
食パン	96.2	99.3	101.7	102.6	101.3	100.4	100.1	100.4	101.5	102.5	103.2	0.7%	1.9%
即席めん	106.6	109.1	117.0	116.7	116.5	116.7	116.7	115.4	115.8	115.6	115.8	0.2%	-0.4%
豆腐	99.3	101.9	101.6	98.4	97.2	96.0	96.2	96.3	96.3	96.0	96.5	0.5%	-0.4%
食用油 (キャノーラ油)	91.2	91.2	88.7	85.2	84.0	83.8	83.5	82.5	82.4	82.5	83.5	1.2%	0.5%
みそ	117.2	119.7	121.0	120.8	122.9	129.0	129.3	128.9	128.1	128.6	128.6	0.0%	4.3%
チーズ	111.0	125.4	129.4	129.4	129.0	129.9	135.4	135.4	135.4	136.1	135.9	-0.1%	3.0%
バター	107.6	112.0	118.4	120.0	120.7	121.1	120.9	121.2	121.2	121.1	121.2	0.1%	-0.2%
マヨネーズ	103.7	112.2	110.6	109.8	108.9	107.4	106.8	106.3	106.4	106.4	106.5	0.1%	-2.5%

資料: 農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1: 平成20年1月の価格を100とした指数で表記している。ただし、バターについては平成20年

5月の価格を100とした指数で表記している。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で毎週実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: マヨネーズのH24平均値は調査を開始した平成24年10月～12月平均。